

第 31 号



会員寄稿特集 東日本大震災に思う

みどりの風

目 次

'10 年度事業報告・収支決算	2・3 頁
特別講演	
「はやぶさ」で得られたこと、「はやぶさ2」で目指すこと	3 頁
'11 年度事業計画・予算	4・5 頁
特別講座「身体表現を豊に楽しく」	5 頁
「就業力育成」	6・7 頁
「キャリア教育にどう取り組もうとするのか」	8・9 頁
学内企業展開催	10 頁
会員寄稿 (東日本大震災に思う)	
M9.0 の巨大地震に思う	11・12・13 頁
東日本大震災に思う	14 頁
東電・福島第一原発事故と私	14・15 頁
東日本大震災－2つの事例に学ぶ－	16 頁
東日本大震災の「宮城」を見る	17・18 頁
中間総会報告	19 頁
自然と親しむ会	
「四谷の千枚田と鳳来寺自然科学博物館を訪ねる」	20 頁
編集後記	20 頁



表紙画：古市久子さん
「カンゾウを玄関に植えています。家に入るときに外であつたいろんなことを忘れてしまいたいと思って」と、ニコリ。
花言葉は、「悲しみを忘れる」「順応性」。
「みどりの風」題字：
森井勝也さん



事業
報告

2010 (平成 22) 年度 事業報告

多彩な企画がおこなわれました。会員以外の参加も得られ、研修では地域からの参加もいただきました。東邦学園に足を運んでいただくことや東邦学園の存在をアピールすることができました。

会員の拡大には一定の成果がありました。学園の協力をいただいたことで、目標を達成しました。



第3回名刺交換会

◇役員会・定期総会・記念講演会・懇親会

6月10日(木) 於：名古屋国際ホテル(中区)

役員会・定期総会・記念講演会・懇親会を開催いたしました。

記念講演会 講師：川淵 三郎 氏(財団法人日本サッカー協会キャプテン)

ワールドカップ開催を控えた時期でもあり、多数の一般参加者がありました。懇親会冒頭では川淵氏も参加し、会員と親しく交流をいたしました。

◇中間総会・講演とシンポジウム(関連記事19頁)

11月12日(金) 於：名古屋ガーデンパレス

「地域創造研究所」と共催で、講演会とシンポジウムを開催しました。

講師：御園慎一郎 氏(愛知東邦大学教授)

シンポジウムのパネラー：

中部大学 中部高等学術研究所教授

服部 敦 氏

あま市市長

村上 浩司 氏

(財)につぼんど真ん中祭文化財団 水野 孝一 氏

地域の活性化を参加者とともに考える場が提供されました。

◇会員研修や親睦活動

□5月「街の巨匠に習う料理教室」全6回を行いました。

特別講座「会席マナー」をおこないました。

□5月「薬草園と精進料理、新緑の東海自然歩道を歩く」(自然と親しむ会 春の例会)

□10月「賢い子どもを育てるために一子育て真っ只中の皆様に」連続3回講座 講師：古市久子

(愛知東邦大学教授)

□10月「熊野古道(馬越峠)を歩く」(自然と親しむ会 秋の例会)

◇法人会員の交流を図る

2月16日(水) 第3回 名刺交換会

会場：愛知東邦大学内カフェテリア

顧問、内藤(リンナイ会長)氏、会長、遠山昌夫(菊水化学工業最高顧問)氏らの参加のもと、約80名の法人会員が名刺交換をおこないました。

◇会報「みどりの風」発行

第29号、第30号を発行しました。

30号からA版に変更しました。

◇会員名簿の発行

2010年末現在の会員名簿を発行しました。

◇学園情報誌(「キャンパス」)を会員に送付しました。

◇東邦学園奨学資金財団(仮称)の組織化を進展させられませんでした。



中間総会 シンポジウム

国内・海外・教育旅行のご用命は

名鉄観光 名古屋教育旅行支店
TEL052-561-6681 FAX052-561-6680



警備保障

中日本警備株式会社

〒460-0022 名古屋市中区金山2丁目1番24号
電話(052)322-3291 FAX(052)322-3110
URL <http://www.nakanipponkei.co.jp/>

2010（平成22）年度 収支決算

（単位：円）

	項 目	予 算	決 算	予算との差	備 考
収入の部	前期繰越金	1,297,305	1,297,305	0	
	入会金 法人会員	50,000	190,000	140,000	予算5社 決算19社
	入会金 個人会員	30,000	51,000	21,000	予算10名 決算17名
	年会費 法人会員	1,700,000	1,780,000	80,000	予算85社 決算86社 納入後退会1社 (2010年度未会員数は101社) ※決算には前納2社分含む
	年会費 個人会員	875,000	795,000	▲80,000	予算175名 決算152名 (会員数は175名) ※決算には前納7名分含む
	広告収入	800,000	705,000	▲95,000	
	寄付金			0	
	雑収入		27,295	27,295	
	合 計	4,752,305	4,845,600	93,295	
支出の部	①事業費 講演料・各種研修	800,000	550,000	▲250,000	
	学園活動支援	800,000	300,000	▲500,000	大学・高校へ援助、出版助成金50万円辞退
	その他（援助金・祝金等）	300,000	160,000	▲140,000	空手、サッカー、アーチェリー、水泳、男子バレー、スピーチコンテスト
	企業セミナー	200,000	53,865	▲146,135	
	企業交流会	150,000	120,000	▲30,000	名刺交換会
	②会議費 総会・中間総会等	1,000,000	935,307	▲64,693	
	③印刷費 会報	300,000	202,650	▲97,350	「みどりの風」2回
	名簿作成費	75,000	69,825	▲5,175	
	封筒・振込用紙類等	20,000	29,925	9,925	
	④通信費 会報・学園広報誌発送webメンテナンス	250,000	124,253	▲125,747	
	⑤事務費・交通費等	70,000	101,230	31,230	
	⑥雑費・東日本大震災義捐金	150,000	535,974	385,974	振込手数料・事務用品他、義捐金30万円
	⑦本会創立20周年記念事業積立金(目標300万円)	300,000	300,000	0	
	次期繰越金	337,305	1,362,571	1,025,266	
	合 計	4,752,305	4,845,600	93,295	

特別講演 「はやぶさ」で得られたこと、「はやぶさ2」で目指すこと

七夕の夕べに贈る“はやぶさ”の話。小惑星探査機「はやぶさ」のミッションは何だったのか。小惑星「イトカワ」から帰還した「はやぶさ」は何を教えてくれたのか。

「はやぶさ2」は、「イトカワ」とは別のタイプの小惑星を目指します。太陽系の過去の環境や惑星の成り立ちが解き明かされることになるかもしれません。このプロジェクトにかかわっていらっしゃる高木 靖彦（愛知東邦大学）教授にお話をお聞きます。

日 時：7月7日（木） 17：00～18：30 会 場：愛知東邦大学 A102 教室 参加費：無料

電気設備・送電線・地中線 設計施工



川北電気工業株式会社

本 社／名古屋市中区栄四丁目6番25号 TEL052-251-7111

<http://www.kawakita.co.jp>

「ウッドピタ」
には証拠がある。

「耐震補強見学会」開催中

ウッドピタ 検索 www.woodpita.co.jp



矢作建設工業株式会社

株式会社ウッドピタ

お問い合わせ (0120)260-220

FUTAMURA



二村産業株式会社

代表取締役 二村 憲

名古屋市中区栄四丁目41番
TEL 052-353-7724 / 052-353-7717
FAX 052-353-7720
E-mail www.futamura-sangyo.co.jp

より良い記録、より豊かな精神は、よい体育施設から生まれる

石黒体育施設株式会社

代表取締役 石黒 和 重

名古屋市千種区春岡2丁目27番18号 TEL052-757-4030

事業
計画

2011(平成23)年度 事業計画

東邦「学園が行う地域活動」(会則)を一層支援し、会員に学びの場を提供することに努めます。また、会員と学園が地域や社会の中でさまざまな貢献・奉仕ができるよう援助します。

本会が各種事業を通じ、より活発になるよう、会の組織的拡大に力を注ぎます。学園教職員、父母・保証人など関係者に、当会の役割を認識していただけるよう日常的に働きかけます。東邦高校・東邦短大卒業生、父母、大学の保証人に本会入会を積極的に勧めます。教職員への入会勧誘も重視します。

会員が参加、交流できる企画を立案します。「フレンズ・TOHO」がコーディネート役となり、法人会員同士の新たな関係が誕生するように努めます。学園のPTA、同窓会、「地域創造研究所」「株式会社イープロ」など各組織との連絡を密にし、協力・協同します。

学園には、本会法人会員へのさらなる優遇をお願いします。

◇役員会・講演会・定期総会・懇親会

6月9日(木) 於: 名古屋国際ホテル

記念講演講師:

山田 真哉 氏(公認会計士・税理士)

演題『経営につながる“会計の本質”をつかむ』

◇中間総会・講演およびシンポジウム

「地域創造研究所」との共催で実施予定

11月中旬

◇会員研修・講演企画

○自然と親しむ会

春の例会「奥三河の棚田―四谷の千枚田―と鳳来寺自然科学博物館を訪ねる」5月14日(土)

秋(夏)の例会「伊吹山の草花を楽しむ」

ガイド「伊吹山もりびとの会」7月30日(土)

○「“はやぶさ”で得られたこと、“はやぶさ2”で目指すこと」(7月7日)

講師: 高木 靖彦 愛知東邦大学教授

○連続3回講座「身体表現を豊かに楽しく」―現場に役立つ実技指導―

講師: 古市 久子 愛知東邦大学人間学部教授

○「地域ビジネスの元祖、近江商人の商い手法(三方よし)を知る」(10月8日) 森靖雄「地域創造研究所」研究員と長浜を訪れる

◇法人会員の交流を図る

第4回名刺交換会(2月予定)

法人会員向け講座の企画(11月予定)

11月29、30日、12月1日の3回連続講座

「混迷する世界・日本経済から企業経営の知恵を読む」

講師: 安保 邦彦 愛知東邦大学地域創造研究所 顧問

◇学園教育活動支援事業

○学内企業展への協賛

○大学・高校各クラブへの激励と支援

○インターンシップ計画への協力

○教育活動支援や出版助成

○中学生対象スピーチコンテストへの協賛

○納涼音楽祭への協賛

○奨学生基金運用にあたる組織確立への援助

◇会報『みどりの風』発行(6月・11月)

◇会員名簿の発行(1月)

◇学園広報誌(『キャンパス』等を送付)

◇地域の皆さんを対象とした学習企画の充実

安全第一・相互信頼をモットーに安全と潤いに
満ちた豊かな人間社会の発展に貢献します

 **中央電気工事株式会社**

取締役社長 加藤 英和

〒460-0004 名古屋市中区栄3-14-22 TEL 052-246-2165 FAX 052-246-2166

豊田信用金庫 天白支店

〒468-0053 名古屋西天白区精出南2丁目2-6 豊城
TEL 052-802-5011 FAX 052-806-5027

2011（平成23）年度 事業予算

（単位：円）

収入の部		備考	支出の部	
①前期繰越金	1,362,571		①事業費 講演料・「研修・親睦活動」援助費	800,000
③年会費 法人会員（88社×2万円）	1,760,000	会員88社	学園活動支援	800,000
〃 個人会員（176名×5千円）	880,000	会員数176名	その他（援助金・祝金等）	300,000
④入会金 法人会員（5社×1万円）	50,000	新規加入5社	企業展援助	100,000
〃 個人会員（10名×3千円）	30,000	新規加入10名	企業交流会（名刺交換会等）	150,000
⑤会報広告収入	700,000		②会議費 総会・中間総会等	1,000,000
			③印刷費 会報	300,000
			名簿作成費	70,000
			封筒各種印刷作成	30,000
			④通信費 会報・学園広報誌発送、Webメンテナンス	200,000
			⑤事務費・交通費等	100,000
			⑥予備費	150,000
			⑦本会創立20周年記念事業積立金（目標300万円）	300,000
			⑧次期繰越金	482,571
合 計	4,782,571		合 計	4,782,571

注）備考欄の会員数は、2011年1月発行の会員名簿による。 創立20周年記念事業積立累積額 1,203,128円

特別講座

幼児教育に携わる皆さんに贈る

「身体表現を豊に楽しく」―現場に役立つ実技指導―

今年も、人間学部学部長 古市久子先生が幼児教育に携わる皆さんに元気をお届けします。
毎日の保育で無理なく表現力を育て、楽しみながら発表できるまでを体験していただきます。
それぞれのテーマは次のようです。

- 1回目 日常生活で育つ表現力
- 2回目 運動会を表現的に
- 3回目 生活発表に向けて



定 員：20名 日 時：8月24日、25日、26日 午前10：00～11：30

会 費：3,000円（フレンズ会員1,500円） 会 場：愛知東邦大学

—— 想いを、カタチに。 ——
TOYO 東洋印刷工業株式会社
 本社 〒462-0805 名古屋市北区八竜町1-25-2
 TEL(052)914-9111(代) FAX(052)914-9119
 URL <http://www.toyo-pi.co.jp>

WATER & GEOLOGIC DEVELOPER
村木鑿泉探鑛株式会社

トンボ学生服
トンボスポーツウェア

株式会社トンボメイト
 〒451-0053 愛知県名古屋市西区北池田1-21-30
 TEL.052-562-1741 FAX.052-562-4135

「就業力育成」は、建学の精神に相通じる 入学前から卒業後までの総合的教育プログラムを用意

愛知東邦大学学長 成田 良一

愛知東邦大学は、文部科学省の支援事業である2010年度「大学生の就業力育成支援事業」GPに採択されました。本学の取り組みは「地域連携PBLを核とした就業力の育成」というものです。2010年度後期を準備期間にあて、今年度からこのプログラムの実施を開始しました。

本学が考える就業力育成は、狭い意味での就職支援に留まるものではありません。就業力とは「社会的・職業的自立を図るために必要な基礎的能力」であり、学生一人一人にそのような能力が身につけて、巣立っていけるようにしたいと考えています。本事業は、そのために構想された、入学前から卒業後までを見通し正課内外の柱をもった総合的な教育プログラムです。基礎学力の向上から専門を活かした「地域連携PBL」にいたるプログラムを用意しています。

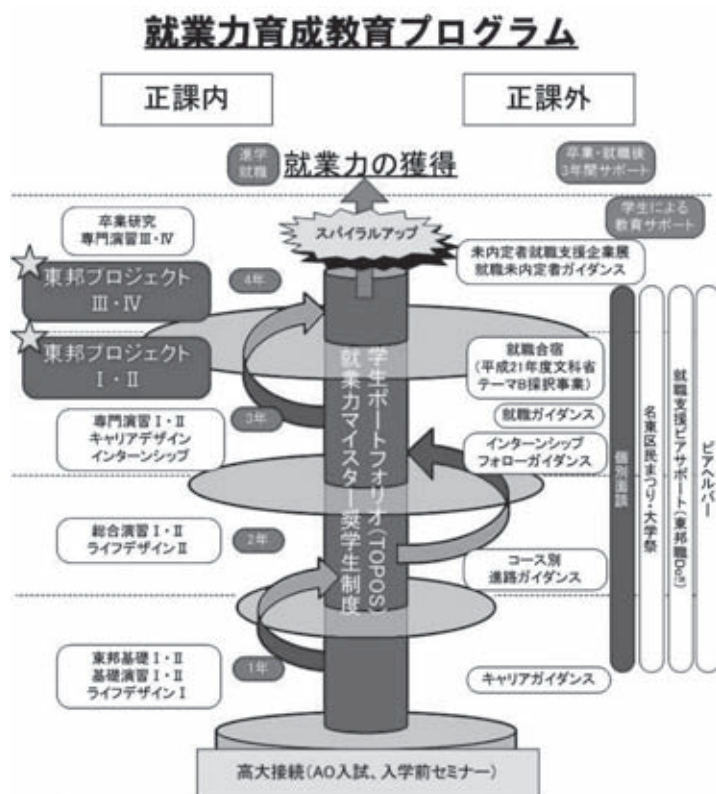
現在の大学では、ここ数年、学士課程教育の構築が課題とされています。この学士課程教育と就業力育成は自立した職業人を育成するという意味で、非常に近い考え方となっています。また、本学の建学の精神「真に信頼して仕事を任せうる人格の育成」とも相通じるものがあります。つまり、就業力育成に力を入れることは、本学の教育の到達点を正面から見据えた本学の教育としての本道なのです。

2011年度からカリキュラムを改訂しました。初年次には、高大接続を意識して「東邦基礎 I,II」を中心に基礎学力やアカデミックリテラシーの向上をはかり、「ライフデザイン I」では個人と社会の関わりや働くことの意味を考え、自分の将来を主体的に探り実現していこうとする態度を養い、二年時以後のキャリア教育につない

でいきます。二年時からはフィールドワークなどの実体験を重視した教育方法を随所に取り入れ、専門教育での「地域連携PBL」の実施に向けた入門とします。

ここでいうPBLとは、Project Based Learningの略で、現代の教育手法の一つです。地域の様々な組織などと連携して学生がプロジェクトに取り組みます。学生は実際にプロジェクトを実施していく中で、様々な問題点に突き当たり、解決の道を探ることになります。通常の講義などで学んだ専門分野の知識や理解を、自分の中にしっかりと定着させ深い理解を得る体験となることでしょう。

また、学生ポートフォリオの運用を開始しました。在学4年間にわたって、学生自らが日々の活動を記録し、自分自身を把握し振り返るためのシステム



です。そのために iPod touch を一年生全員に貸与し、無線 LAN を通じて学内の色々な場所でポートフォリオを使えるようにしました。

学生の正課外の活動も積極的に評価し、勉学と合わせて就業力の基礎となるものと位置づけています。正課内外の活動を奨励するために、就業力マイ

スター奨学制度を導入します。

2011 年度を本学の教育改革の元年と考えています。本学の取り組みは地道に色々な要素を総合的に取り入れたものとなっています。今後、その効果は徐々に浸透し、本学の教育の質を向上させるものとなることを期待しています。

本学は、平成 22 年度文部科学省「大学生の就業力育成支援事業」に優れたプログラムとして採択されました。

就業力は、社会が学生に求める社会的・職業的自立を図るために必要な基礎能力です。この就業力を本学では地域連携 PBL を核とした正課内外の教育プログラムと自己チャレンジの目標設定・達成を促すことにより育成を図ります。

この地域連携 PBL (Project Based Learning) とは、地域社会や企業の様々な課題に担当教員の指導の下、学生と学外の各組織が連携・協働して解決を図ります。学生はその過程の中で学びを深め、実践力を養います。

本学が考えている地域連携 PBL の具定例としては、①旅行会社と連携した就職のための企業研究ツアーの企画運営② NPO と連携した

マーケティング③地域、行政、施設などとの連携による健康・福祉・社会スポーツの普及啓発、などを考えています。

「フレンズ・TOHO」の法人会員の皆様には、ぜひ協働でプロジェクトを組んでいただけるとありがたいと考えています。この紙面をお借りしよろしくお願いたします。

就業力育成事業の採択 学生が自ら振り返り、自ら気づくことこそ就業力

このプログラムは、3、4 年次に実施し、1、2 年次では主に基礎学力の向上

を図ります。2011 年度より、1 年生を対象に「東邦基礎」という科目を設置しました。国語力を着実に身に付けさせます。

学修支援センターを設立し、キャリアアドバイザーを配置し、アドバイザー 1 人につき 50 名前後の学生を担当して、対面性と対人性の高い学習サポートを行います。

愛知東邦大学就職課課長 長島 賢

東邦スイミングクラブ
〒465-8516 名古屋市東区平和が丘3-11 TEL 052-782-1266
東邦スイミングスタジオ
〒463-0604 名古屋市中村区黄金1-18 TEL 052-436-7712

各種スポーツ施設の企画・設計・施工

株式会社 **S.T.S.**

〒461-0027 名古屋市「緑区春岡2」1122番18号
TEL 0521 763-8141 - FAX 0521 763-8110



青 島 設 計
AOSHIMA ARCHITECTS & ENGINEERS INC.

名古屋 052 961 1341
東京 03 3507 7341
FAX TEL 052 961 1343 E-MAIL



集いと学び空間をデザインする

愛知株式会社
http://www.axona-aichi.com

〒461-0003 名古屋市東区簡井3-27-25
TEL 052 935-6226 FAX 052 935-6220

キャリア教育にどう取り組もうとするのか ライフプランを描かせることは、学習意欲を生み出す

東邦高等学校は、キャリア教育を積極的に推進しようとしています。5月2日（月）、長沼校長と担当者の池田さんに、事務局がこの「キャリア教育」について伺いました。

進路について総合的に考える

○高校が取り組もうとされている「キャリア教育」は、どんな内容でしょうか。

◇**校長**：キャリア教育は、文科省の指導により公立高校中心に数年前から進められてきました。本校では昨年導入について検討を始めました。進路指導について、進学・就職と単純に分けるのではなく、進路について総合的に考えなければいけないという思いから、キャリア教育を考えるようになりました。

私学、特に東邦の中で何ができ、どんな役割が果たせるのかを考えていると思っています。



長沼均俊 校長

○キャリア教育＝就職教育、あるいは就職するための力を付ける教育ととらえられがちですが…

◇**池田**：キャリア教育という言葉は、まだ定着しておらずキャリア教育自体のイメージを持ちにくい現状があります。そのため、東邦高校としてのキャリア教育の定義をする必要があります。私自身は、将来の自分自身がどのようにライフプランを描くのかを考えられる力を養う教育を構築できればと考えています。

進路指導室を見ていると、自分の成績からどこの大学に進学することができるかに関心を示す生徒が多いように感じています。

将来の自分自身のライフプランを描いて、そのライフプラン達成に必要な進路先を決める考え方になっていません。目的意識を持たせた進路指導が必要だと思います。

キャリア教育を職業指導と狭い意味で捉えるのではなく「自らの進路を選択・決定し、将来、担うであろう「人生の役割」を果たすために必要な力を身に付ける、児童生徒一人一人の「生き方教育」として捉える必要があると考えています。

○ライフプランを描かせるという具体的な指導とはどんなことなのか。

◇**校長**：昨今、高等教育機関への進学率の上昇に伴い、進路意識や目的意識が希薄なまま進学する者が少なくない状況に加えて、少子高齢化や産業・経済の構造的変化等の影響による若者の社会的自立の状況は社会問題として取り上げられます。特に、普通科偏重の進路指導への是正の動きは、高校の普通科においてキャリア教育の重要性が示される背景にもなっていると思います。

東邦に目を移し、推薦試験で入学してきた生徒諸君に「なぜ東邦を選んだのか」と尋ねると、「部活と勉強が両立できるから」というような高校生活に対する肯定的で積極性のある答えが多く返ってきます。このような意欲を、自らの人生設計につなげていけるような意識や行動力に引き上げていきたいと考えています。

本校は、この数年間「総合的な学習の時間」の中で、社会や職業に関心を持つ一助にすることをねらいに「プロフェッショナルに聞く」という企画に取り組んできた実践もあります。これからつくる本校のキャリア教育は、今よりもう一歩進んでキャリア

印刷というメディアを通し 未来に触れる
maruwa (株) 丸和印刷
〒468-0011 名古屋市天白区平針4丁目211番地
TEL (052) 802-4141 FAX (052) 802-9355
ISO9001 ISO14001 認証取得 E-mail: info@maruwanet.co.jp
ISO27001 URL: http://www.maruwanet.co.jp

充実のコーヒープレイクを合い営業に…
富士コーヒー株式会社
本社 名古屋市中区栄西丁目16-27 TEL (052) 251-4321
営業本部 名古屋市中川区丹羽町6-18 TEL (052) 362-1161
営業所 中川・愛北・南信・松本

教育＝職業訓練という姿勢から脱却し、生徒諸君の興味・関心がどこにあるべきなのかを考えさせたい、そのためにはどんな力をつけていくことが必要なのかを考えさせる総合的なプログラムをつくるということです。

キャリア教育に特別なものはない

○教科指導の中で具体的なキャリア教育を考えておこなうことは難しいように思えますが。

◇池田：抽象的な言い方かもしれませんが、キャリア教育に特別なものがあるという訳ではありません。各教科を学ぶことにおいても、なぜこの教科を学ぶのかを気付かせること、考えさせることが自らの生き方に繋がる＝キャリア教育とも言えるからです。

◇校長：ここ数年間、環境教育に取り組んできました。「エコアクション 21」の認可を受けています。外部団体による PDCA サイクルによるチェックがされる中で、毎年、生徒・教員の内発的な活動にかなげられるよう活動の質の向上が求められています。教科や分掌でどう取り組むのかを考えていかなければならなくなっています。実際の教育活動の中でどう環境問題を取り上げるのが問われてきています。

これと同じように、本校におけるキャリア教育の導入にあたって、日常学ぶ教科と自分たちの生き方や将来との関連性について、積極的に研究し取り入れることが本校独自のキャリア教育の推進には欠かせません。

◇池田：生徒たちが考えるきっかけを与えられると、学びに対する姿勢も変わる素直さと真面目さが東邦生にはあります。

○生徒たちを変える仕組みをどうするのかという点ではいかがですか。

◇池田：それが、東邦としてのキャリア教育を研究して取り組むべきこれからのチャレンジなのです。生徒たちに学びの環境を提供するために、多くの関

係者を巻き込んで作り上げていきたいと思っています。たとえば、PTA や地域の方、同窓生も。

◇校長：キャリア教育に限ったことではありませんが、生徒の学習姿勢の変化については、正課内の活動だけでなく正課外の活動においても大きな教育的効果が得られるということ、多くの教職員が認識するところです。その一つとして、大学で行なわれた「就職合宿」で学生が変わったという報告を聞いています。このような非日常の空間や時間の中での活動は、生徒の姿勢を刺戟する大きな力が働くという実例の一つでしょう。

高校でも、「職場訪問」や「職業の話を聞く」等の企画で、生徒の学ぶ姿勢により変化が認められる例があります。例えば、学校の近くの小料理屋の板前さんで、70 歳過ぎの方がいらっしゃって、生徒たちが、その方に聞く機会があったんです。すごい迫力で、引き付けられ感心し、興味を示しました。日常の授業ではなかなか味わえない体験的で実感の持てる活動が功を奏しています。

ロールモデルを見せる

○地域や保護者の力をどう取り入れていくのかという点ではいかがですか。

◇校長：今は、若者にとって、なかなかロールモデル



池田暁生 さん

ルがつかれない時代といわれます。国際比較でみる日本の青少年の学びに対する意欲の低さも、これとけっして無関係ではないでしょう。そのような観点からみて、青少年期の生徒たちにとって、

色々な大人や仲間を見てロールモデルが持てることは自らの目標につながる意味でも大変重要なことです。

高校時代の3年間、生徒の成長は心身ともに著し

いものがあります。それは、高校生活の中に彼らの成長を育む空気が流れていることによるものだろうと思います。ライバル意識を持てる仲間との競いあいや自主活動の中で築かれる先輩・後輩等の人間関係から学ぶ精神的成長は、何ものにも代え難いものです。そういう意味でも、いろいろな学校行事の意義を再認識し、企画の充実に向けた取り組みをとおしてロールモデルとなるような人との出会いがあれば素晴らしい。その中で、地域や保護者との連携を深めていくのも一つの方向ではないかと思っています。

この数年、学校内外において学力にかかわる議論が盛んにありましたが、われわれは二項対立的な議論の展開に終始しがちだったのではないかと感じています。これから大切にしたいのは、学ぶ意欲をいかに内発的につくりだせるか、その指導体系の構築です。進路学習は、現在の総合的な学習の時間でもテーマの一つにしてきましたが、他のテーマにも取り組んでいます。キャリア教育の議論は、まさに今からですが、東邦生の生き方にかかわる考え方をどのように紡ぎ出すか、総合的な学習の時間だけで完結させずに教科や行事等との関係性も考えていけるよう努力したいと思っています。

多くの生徒たちは、中学時代から偏差値重視で進路を考えてきたせいか、進路目標への展望が持ちづらくなっています。この点からも、ライフプランを持てることで学習意欲を生み出すこととなれば、これは大きいと思います。

◇池田：日常教育の中に、キャリア教育を柔軟に取り入れ、東邦の建学の精神に立ち返ることができれば「キャリア教育は東邦教育」として言い換えることができるかもしれませんね。

◇校長：キャリア教育は、全国的にみても緒に就いたばかりで、そのとらえ方はまだまだ浅いと思うんです。公立校のインターンシップの実践がキャリア教育として捉えられたり、先輩を呼んで話を聞き、それでキャリア教育のプログラムが完了したようなケースも報告されたりしています。このような時代だからこそ、私学として真摯にキャリア教育について研究し、実のある取り組みを進めたいと考えています。

○東邦高校からキャリア教育のモデルを創出してほしいと願います。大変な道のりだろうと思いますが、進路指導室、運営委員会が指導力を発揮してください。

今日はどうもありがとうございました。

学生も運営の一部を担って

学内企業展開催

厳しい就職状況下でも意欲的に

名刺交換会の前に学内企業展が開催されました（2月16日）。本年度3回目となる企業展は、3年生対象でおこなわれました。愛知東邦大学では学生が中心となって「東邦職DO」という組織を創り、自分たちの就職活動を支援しようと活動してきました。学生が当日の運営の一部や企業に参加を呼びかけるなど、学内での就職相談会（企業展）を実現してきました。

愛知東邦大学就職課と「フレンズ・TOHO」が支援し、学内企業展が開催されてきました。本会の会員企業からも、毎回参加をいただき、学生にとっても、会員企業にとってもよりよい出会いがあることを願っておこなわれています。予め参加企業のリストからお尋ねしたいことを前もって整理し、伝えておくことや話を聞きたい企業を選んでおくなど、限られた時間を有効に利用しようとする運営方式を取り入れています。



学内企業展で人事担当者から話を聞く学生

鈴木健治法律事務所

弁護士 鈴木 健治（高17回）

〒451-0031 名古屋市西区城西区1丁目4番16号 杉浦ビル2階
電話 052-532-8320 FAX 052-532-8120



みつほしいんさつ
三星印刷

〒451-0041 名古屋市西区堀下1-1-12
TEL 052-571-0796 FAX 052-561-8517

会員寄稿

東日本大震災に思う

地震・津波・原発事故に学ぶ

東日本大震災によりお亡くなりになられた皆様とご遺族に対し心よりお悔やみ申し上げます。被災された皆様には謹んでお見舞い申し上げます、一日も早い復興をお祈りいたします。

M9.0 の巨大地震に思う

元東邦高校理科教員 丹羽 義兼

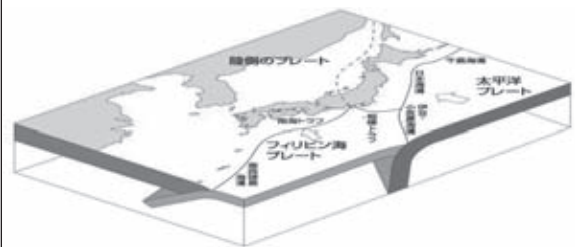
はじめに

恩師村松郁栄先生は、濃尾地震を始め、地震研究者として多くの功績を残された私の自慢の先生である。先生の指導の下、仲間と高山・恵那・岐阜での微小地震の3地点観測が、学生時代の卒論であった。……地震についてレポートを依頼されたが、連日流される東日本大震災の惨状報道を見ながら、やがてやってくる超巨大地震を、私たちの地域ではどう迎えるかそれを思わずにはいられない。

半世紀、地球科学の進歩は宇宙・歴史・環境・災害など様々な分野で著しい進展がある。現在、東日本大震災や東海地震の根拠となっているプレートテクトニクス理論は学生当時、海洋底拡大説としてロバート・ディーツ (Robert S. Dietz) の論文によって紹介されはじめたばかりであった。地球の様々な事象や現象を、壮大なスケールでかつ統一的に解釈できる理論に、当時は大きな衝撃を受けたものである。1960年代の半ば、東邦高校に理科の教員として奉職し、地学(地球科学)を担当した。この理論は教科書にはまだ記述されていなかったが授業で補足ができるように、1912年ドイツのアルフレート・ヴェーゲナー (Alfred Wegener) が提唱した大陸移動説の記載されたものや、海洋底拡大説という一句でも入ったものを教科書選定の1つの基準にし

たように思う。教科書へ記載は数年を経て、テューゾー・ウィルソン (John Tuzo Wilson) によって、1968年プレートテクトニクス理論として完成して以後のことであった。

A図 内閣府防災情報「日本のプレートより」抜粋



地球は、陸や海をのせた10枚ほどのプレート(岩板)でおおわれ、地球内部の巨大な熱エネルギーがそれらを生成し、消滅させながら表面を移動している。プレートは、それぞれ年に数センチの速度で動き、プレート同士の境界あたりでは多くの地震や火山を引き起こしている。この理論をもとに、海洋型の大地震研究は飛躍的に発展した。今日、様々な防災広報やメディアによって、日本のプレートの動きはA図のようにほぼ常識となり紹介されている。日本の周囲は4枚のプレートで覆われ、東日本では北アメリカプレートの下に年間平均8.5~10cmほどのスピードで移動してきた太平洋プレートが沈



For your secure days
セクドム株式会社
<http://www.secdom.com>



工業用ゴムプラスチック製品
丸善株式会社

会長 木村 和義

本社 名古屋市中区金山4丁目3番11号
〒460-002 TEL(052)332-0811 代 FAX(052)332-3566

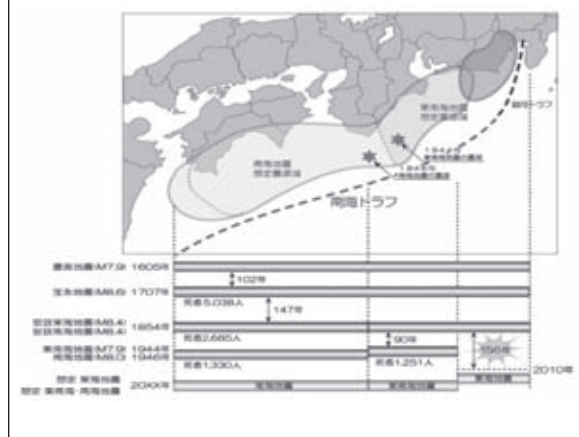
み込みながら日本海溝を形成している。また西日本のユーラシアプレートへ向かってフィリピンプレートが沖縄沖で7.5、南海沖4.5 東南海沖4.0 駿河湾では2.3cmほどのスピードで移動し、沈み込みながら南海トラフを形成している。北米プレートでは北南で移動速度にあまり差異はない。しかし、フィリピンプレートは伊豆半島をのせているのが「つかい」となるかのように駿河湾ではあまり動かず、南西の沖縄沖と比べると、その移動速度に大きな差異が生じている。

東海地震は、本当に予知できるか

東海地震が予知できる可能性があるとする根拠は、東京帝国大学地震学教室の今村明恒教授が行っていた静岡県掛川市～御前崎間の水準測量から始まった。今村教授は、この地域で発生する巨大地震の予知を試みた人である。その測量を開始したのがちょうど昭和の東南海地震（1944 年）が発生する一ヶ月前からである。地震前日から当日にかけて地震発生時とおなじように御前崎の方が約 20mm 程度持ち上がる動きが確認できた。「もしも、このような動きが次の東海地震の前に現れれば、現代の観測機器なら確実にとらえられるに違いない」という考えが基本となって、現在の東海地震予知体制がつくられたわけである。しかし、昭和の東南海地震の、その一つの地震事例・観測事例だけで地震予知の根拠とするのは、と疑問を提してきた研究者も少なくなかったが、さらに膨らんでいる。なぜならば、予知を前提としたこの法律制定後 26 年間に発生した大地震（北海道南西沖地震、鳥取県西部地震、芸予地震、宮城県北部地震、十勝沖地震など）は、より近代的な観測にもかからず、どれ一つ予知できていない。中部・東海地方はこの法律により、市民や行

政は警戒宣言が発令されることを信じ、その時点での防災対策にのみ力点が置かれる危険性がある。「東海地震は予知できたら儲けものつもりで、原則は予知できないことを前提にした防災対策に切り替えるべき」という考え方に傾いてきている。

B図は気象庁「東海地震における基礎知識より」抜粋



東海地震は超巨大地震になる

東海地震がこれまで起きていないのは一見、ありがたいようにも見えるが、震源の予想領域の岩盤がゆがみに耐えれば耐えるほど、エネルギーは蓄積され、地震として開放されるとき危険性は益々増大しつつあるかもしれない。今回の東北地方太平洋沖地震が4つの震源域で同時に破壊したように東海の震源域を起爆に、東南海2、南海2を加え5つの震源域の破壊が同時に進めば、東海連動型地震もまた、M9.0が想定されることになる。

東日本大震災は想定外か

2008 年、大阪市立大学原口強准教授は津波堆積物の調査により、869 年の貞観地震は、1100 年前、震源域が連動した超巨大地震によるものと指摘していた。また最近、紀元前 4000 年までさかのぼると、500 年から 1000 年の間隔で津波を伴う超巨大地震があったことがわかってきた。このような調査から、当然のことながら超巨大地震は想定内に入れ、様々な対応を準備しなければならないことは明らかであった。前述の石橋克彦氏は 1976 年時点における東海地震の切迫性が過大評価だったことを認め、「30 年前に、発生時期の予測が困難なのに東海地震の切迫性を強調したのは不適切ではないか」という批

美ノと心を大切にしない社会の実現

丸美産業株式会社

代表取締役会長 嶺 木 昌 行

代表取締役社長 南 喜 幸

ISO 14001 認証



〒467-8533
名古屋市瑞穂区瑞穂通3-21
TEL (052) 851-3511(代)
<http://www.marumi.com>

判があるかもしれません。しかし、大自然の理解がまだ極めて不十分な私たちにとっては、限られた知識で危険性が考えられれば、それを共有して備えるべきだ」と述べている。研究者として当然の警告であり、空振りに終わるのを恐れて、想定外というよりはこの方がよい。今回の津波災害の警告は研究者の責務であったと思う。

その超巨大地震の前兆はあった

今回の地震も含め、地震予知の困難さを改めて感じずにはいられない。500年から1000年規模で起こる超巨大地震について、地震の時間スケールや震源領域の大きさを前に、僅かな年数の観測データで発生時やその規模を予測するという難しさは当然ある。宮城沖地震の今後30年以内に発生する確率が99%と全国で最も高く、宮城県内の一部で震度6強の強い揺れが予想されていた。9日昼前に発生した三陸沖の地震については、政府の地震調査委員会委員長で東京大学・阿部勝征名誉教授は、「将来、発生が懸念されている宮城沖地震と共通点はあるものの、震源の距離が約100キロも離れ、その関連性は判断できない。過去に発生した地震後に比較的規模の大きな余震が1週間程度続いたことがあるので、余震活動に十分注意してほしいと述べていた」その後も余震とみられる地震（最大M6.3、震度3）が相次いだが誰もが超巨大地震の前触れとして危険信号を発することはなかった。大きな地震が発生する際に、震源となる断層の破壊を誘導する微小な割れ目（破壊核）を形成するが、次々と発生した群発地震は、後になってみると余震などではなく、今回の大地震の前触れ（プレスリップ）ではなかったろうか。今後起こる地震への教訓を汲み取らねばならない。

災害に強い郷土や地域社会

今回の状況を見ると仮に地震の予知判断が正しくできたとしても、避難・待機・当面の支援も、その後の課題も山積している。期間が永くなれば個人の生活や経済活動も大変となる。数日の間隔でぴたりと予測したとして、さらに風評やパニックを前にして、それもまた大変な状況に変わりはない。政府や地域行政の情報公開とその対策の困難さを思わずにはいられない。世界中にこれほど自然災害の多い国はない。個人・地域・企業・学校・病院・政府・行政さまざまなレベルで非常時に備えた対策をたて、これからも突然襲ってくる巨大な台風や大雨、超巨大地震・火山災害などをお迎えせねばならない。人間の力を過信し過ぎるとシッペ返しに合う。防災という観点から押さえ込もうとしても限界がある。今回の災害で改めてとくに確認しなければならないことがある。地震予知や防災訓練も大切ではあるが、それ以上に地震発生以後の予想される災害についての国民の本当の理解と認識が必要なことであった。「災害は忘れたころにやってくる」とよくいわれるが、関東大震災・阪神大震災・そして今回の東日本大震災、地震発生以後の被害がいかに大きいかということである。原子力発電の問題も含め、リスクや警鐘を鳴らし続けるのは研究者の役割であり、しっかりと耳を傾け対策をとるのは政治や行政である。我々もまた、科学的な先進的な研究成果を共有し、先人の経験と知恵を学び、さまざまな危険を察知し、できるだけ被害を最少限度に抑えながら、立ち上がることも早い、余裕のある災害に強い郷土・地域社会を築く必要があることはいうまでもない。

◆三菱電機株式会社・新電元工業株式会社 代理店◆

EH イレックヒシキ株式会社

代表取締役会長 下出 玲子
代表取締役社長 下出 啓介

本社 〒463-0893 名古屋市中区東区 2丁目22番地
TEL: (052) 762-2021 FAX: (052) 704-3131
常崎営業所 〒444-0075 岡崎市伊賀町 3丁目14番2番地
TEL: (0564) 21-6793 FAX: (0564) 21-6838

30年からの土地活用
KODATEX
コダテックス

土地・建物の有効活用のバイオニア
貝沼建設株式会社
kainuma

代表取締役 宇山 公一郎 〒460-0008 名古屋市中区栄五丁目7番14号
TEL: (052) 242-1131 FAX: (052) 242-2291

東日本大震災に思う

愛知東邦大学教務課 志水 廣己

私は東邦高校在職中、理科を担当していました。学生時代に地球科学・地震学を専攻していた関係で、教科「地学」を担当することも多く、特に「地震分野」にはずいぶん力が入りました。実は、カリキュラムに「地学」を置いている高校は少数派です。大学受験との関係で、“必要度”が小さいからです。高校カリキュラムから「地学」分野は限りなく後退しているといっても過言ではありません。しかし、東邦高校は違っていました。自然科学の「物化生地」4分野を出来る限りバランスよく教育することを方針として、「地学」を積極的にカリキュラム配置していました。私はそんな東邦高校を誇りに感じていました。

学校教育で基礎的知識を

「地学」教育では、地震国日本の宿命的存在を地球科学的に紹介し、地震予知や減災対応などを日常生活の視点で解説します。私は、地震国日本の教育現場だからこそ、「地学」教育をもっと積極的に実践して欲しいと願ってきました。専門家だけでなく一般市民が、地震発生頻度の頻度や破壊的な津波の問題、更には断層の存在と原子力発電所の立地条件など、

学校教育の中で広く基礎的認識を持ち、社会生活の中で活かす流れが必要です。東日本大震災後、様々な論議が沸騰していますが、私は学校教育の果たす役割もあらためて議論して欲しいと感じます。

防災訓練は適切か

もうひとつ、いわゆる防災訓練について一言。病院や介護施設などでは、場合によっては寝たきりの方々も含めて全構成員を含みこんだ真剣な防災訓練がされていると聞きます。しかし、学校ではどうでしょうか。どれだけの事態を「想定」した、真剣な訓練が実施されているのでしょうか。私も東邦高校・防災委員会の一員として様々な問題提起をさせていただきましたが、当時は、生徒・教職員だけでなく地域の方々をも視野に入れた震災後の対応マニュアルまでは手が及びませんでした。今は、愛知東邦大学で嘱託事務に就いていますが、大学自体が持つ対応マニュアル、大学構成員の防災意識や具体的訓練はどのようになっているのか、あまり見えてきません。学校と避難所を巡る報道も多い中、高校・大学を持つ東邦学園の社会的役割を具体的に議論されるよう望みます。東海地震は待ったなしで迫っています。

東電・福島第一原発事故と私

前愛知東邦大学教授 荒川 紘

3月11日には静岡の自宅にいた。戦前に建てられた木造の家は不気味な音をたて大きく揺れる。つぶれる、と直感した私は外に飛び出した。学生にはあわてて教室を飛び出すのはよくない、と教えていたが、それを守れなかった。ついに東海大地震か、そうならば浜岡の原発は大丈夫か、不安が私の胸を過ぎった。幸い無事だった家にもどり、テレビをいれると、震源は東北地方の太平洋沖、マグニチュードは8.3から8.4、まもなく9.0に訂正される。どんな大きさなのか想像ができない超巨大地震だ。

福島の塙町にある実家に電話をしたが通じない。テレビが頼り、かじりつづけとなる。地震、そして津波の被害は時間を追って甚大となった。街や集落を襲う津波の画面には思考する力を失い、この世とは思われない映像を目で追っていただけではなかったろうか。犠牲者の数は阪神大震災の犠牲者を超える（5月12日現在死者1万4998人、行方不明者9761人）。

福島県では東京電力・福島第一原発の事故が加わる。地震と津波で電源を喪失して緊急冷却水を炉心

に注入することができず、炉心にあるウランの燃料棒は溶融した。そのとき発生した水素ガスが酸素と化合し水素爆発を起こして建屋を破壊、ウランの核分裂で生成したヨウ素やセシウムなどの放射性物質が空気中に放出される。急速冷却のために外部から注いだ水には放射性物質が混ざり、施設内にあふれて、一部は太平洋に流出する。大気も土壌も海洋も死の灰と死の水で汚染された。

3月16日の卒業式に出席した私は翌々日に動きだした茨城県大子^{だいこ}町行き的高速バスの指定席券を苦勞して入手、実家に向かった。大子のバス営業所ではガイガーカウンターを積んだ北陸電力の放射線測定隊の車に出会った。東電の応援に駆けつけたのだという。ようやく到着した福島県は大混乱であった。実家も地震の被害をうけた。余震もつづく。でも、それ以上の不安は放射線、原発からだいふ離れた中通り地方なのだが、外出は控えよ、雨にはぬれるな、といわれていた。原発周辺の市町村住民には政府から避難指示がだされた。安全だといってつくった原発がチェルノブイリの原発とおなじ最悪のレベル7の事故を起こす。こんどは安全でないからといって、政府は避難を指示する。それも、指示をしただけである。避難先や搬送手段を用意してくれたのではない。搬送の途中や避難先では多くの病人や老人が命を落とした。地方紙の新聞を読むと、その悲惨さがよく分かる。その犠牲者は優に100人を超す。原子力安全・保安院の広報官はチェルノブイリとちがって福島原発では死者はゼロであることを強調していたが、避難民を無視した話だ。だから、放射能のなかにいたほうが安全だといって、自宅に留まる人もいた。牛などの家畜を放置できないといって指示に従わない人も少なくなかった。しかし、スーパーもコンビニも閉店となり、食料の入手が困難になった。政府も東電も彼らに救いの手を差し伸べることはなかった。このような非人道的な避難指示をおこなった政府は憲法の保障する国民の生存権をどう考えていたのだろうか。

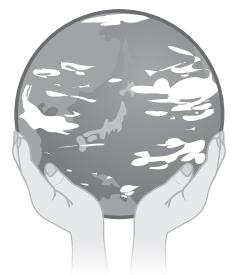
すべての電気が東京方面に送られる電気のために福島県民は塗炭の苦しみを味わされる。2ヵ月たったいまでも5万9000人もの人々が避難生活を余儀なくされている。ヨウ素は減少しても、半減期の長いセシウムが帰宅を阻んでいるのだ。先日(5月3日)福島県北部で土壌汚染の調査に携わっている東北大学の大槻勤先生(電子光物理学研究センター)に

会い、調査についての話をうかがったが、先生もセシウムを土壌から除去するのはとても難しいといわれていた。苦しみはまだまだつづきそうである。原発の「収束作業」も予定どおりにゆきそうにない。新たな爆発の心配も消えない。

福島県に生まれ育った私は、大学では原子物理学を専攻した。原発は原子核物理学の応用の技術なのだが、私は原発の開発の道には進まなかった。原発のような技術を生み出す科学の本性を追求したくて、科学史の教師となり、講義のなかで原発の話をするようになった。前任の静岡大学から50キロメートルほどのところにあるのが中電・浜岡原発である。愛知東邦大学では「物質のしくみ」の講義でとりあげた。危険なだけでない、放射性廃棄物の処理や原発の廃炉の経費を考慮すれば、けっして低コストの発電法でないことも知ってほしかった。福島での大事故に遭遇して、このような教師でよかったのかと反省もさせられたが、それでも、教育によって正しい世論を形成し、政治を変えねばならないという信念には変わりがない。それに、この期におよんでの反省では遅すぎる。

今回政府が浜岡原発の停止措置に踏み切ったのは評価されてよい。政治的思惑が見えないわけではないが、政府も原発批判の世論を無視できなかったのだ。だが、津波対策の防潮堤をつくれれば再開を認めるというのは解せない。浜岡原発は地震にもっとも危険な原発でありつづける。抜本的なエネルギー政策の転換がはかられるべきなのだ。世界全体では昨年中に太陽光や風力などの再生可能なエネルギーの発電容量が原発を逆転している(毎日新聞、4月11日)。原発に依存しようとしてきた日本は時代遅れの国なのである。

福島県についていうならば、福島第二原発を含めて、10機すべての原発を廃炉にし、そこを太陽光と風力による発電の基地とする。ヒマワリやナタネも栽培、バイオ燃料を生産する。そうして、空と山と水を愛した智恵子の心と卑怯を嫌い弱者を思いやる会津武士の魂といわきの生んだ「フラガール」の健康な明るさにも学びながら、「うつくしま、ふくしま」の実現をめざす、というのはどうだろうか。



東日本大震災 -2つの事例に学ぶ-

(有)渚商店取締役社長 加藤 誠一

この日3月11日は、千年に一度の大災害と言われた北関東大震災が襲った。

この大きな惨事の中に2例の奇跡的出来事があった。

その一

津波で壊滅的な被害を受けた三陸沿岸の中で、岩手県北部にある普代村^{ふだい}を高さ15メートルを超える防潮堤と水門が守った。

太田名部漁港^{おおたなべ}で飲食店を営む太田定治さん(63)は、高さ15.5メートル、全長155メートルの太田名部防潮堤を見上げながら話した。

「津波が襲った先月11日、店にいた太田さんは防潮堤に駆け上った。ほどなく巨大な波が港のすべてをのみ込んだが、防潮堤が食い止めてくれた。」堤の上には太田さんら港内で働く約100人が避難したが、足もとがぬれることもなかった。「これがなかったら、みんなの命もなかった」ともいえる。

村は1896年の明治三陸津波と1933年の昭和三陸津波で計439人の犠牲者を出した。当時の和村幸得村長(故人)が「15メートル以上」を主張した。「明治に15メートルの波が来た」という言い伝えが、村長の頭から離れなかったのだという。

和村さんは悲劇を繰り返してはならないと防潮堤と水門2つの建設計画を進めた。総工費は約36億円。人口約3千人の村には巨額の出費で、建設前には「高さを抑えよう」という意見もあった。だが、和村さんは15.5メートルという高さにこだわった。和村さんは反対する県や村議を粘り強く説得し、建設にこぎつけた。完成後村長退任時のあいさつで職員に対し「確信を持って始めた仕事は反対があっても説得してやり遂げてください」と語ったという。

「当時の判断が村民の命を守ってくれた」とみんな感謝している。(2011年4月3日 読売新聞より抜粋。2011年4月25日産経ニュースより抜粋)

その二

群馬大学大学院工学研究家(片田教授)による学

びを通して

原則1 想定を信じるな。原則2 最善を尽くせ。

原則3 率先して逃げる。

これらを実践した中学生達がいる。

釜石東中学である。地震発生直後校内放送に先駆けて全校生徒みずからが上述の教授の助言に従い5分以内に率先して逃げる。年長の者が年少者を支え助ける。高台に避難する途中で小学生を誘導、更に園児を抱えての避難と。先の学び通り実践し多くの命が救われた。

以上2例の教訓は

想定外とは、原則1にある「想定を信じるな」これは都合の良い条件を優先している場合、例えば極端なコストダウン。人権軽視 価格競争による皺寄せ。想定外の出来事に対して何が力になるのか。それは他の人を助ける事を前提とする。信じた道を歩み続ける真面目さ。縦割りでは無くそれぞれが見渡せる関係。そう、我が「東邦学園」の伝統、学びの関係にも生きているように思われる。

以上2例より感じた事

私たちは目先の事に囚われがちなのですが、この事例にあるように、今こそ立ち止り行く末を見つめなければならないかと思う。都合の良い想定というのは壊れやすく、往々にして人は、都合の良さを選ぶものです。MAXへの甘さ。それらは、融通性・見込み節約・価格破壊による競争激化等、都合の良い理屈によって時には、犠牲を強いら、昨今の勝ち組負け組と仕分けられてしまった。

想定とは一体何を優先するのか。どんな事を優先するのか。そこに妥協はあるのかないか決して弱者を犠牲にしてという論理は成り立たないはずではないだろうか。



東日本大震災の「宮城」を見る

愛知東邦大学地域創造研究所顧問 森 靖雄



釜石線（不通）線路上から見た気仙沼海岸市街地の惨状（2011.4.20.撮影）
＝上部（対岸）丘陵の手前が気仙沼湾。右の写真の大型漁船は陸に取り残されている

震災の常識が通じない現地

本年3月11日に宮城県沖で起きたマグニチュード9の大地震。1995年1月の阪神淡路大震災被災業者の調査経験をもつ筆者（中小企業論・地域経済論担当元教員）は、今回も何かのお役に立ちたいと考え5月から調査に入る予定です。それに先立って、現地支援団体の協力を得て4月18～21日宮城県各地の被災地を予備調査してきました。

今回の震災は「大地震」「大津波」「原発事故」という3大被災が一度に起きたのが特徴でした。そのうち「大地震」だけが起きた阪神淡路震災であの惨状でしたが、結論を先に言うと今回は地震による被害は、古い造成地など比較的限定的でした。震源地が陸地から離れていたため縦揺れがほとんどなく、強い横揺れが3分間前後も続きました。そのため建物被害は局地的にとどまり、仙台の中心部などでは「地震でやられた」という印象はほとんどなく、被害は局所的でした。

予想を超えた「津波」

新聞では津波被害とともに「津波てんでんこ（津波の時には家族はばらばらで逃げよ）」など、日常の備えもあった地域だと報道されていますが、それは三陸地方（岩手県）の話で、宮城県ではこれまであまり大きな津波は経験していませんでした。一番近い「チリ地震津波」でも50cmでしたから、「今回は1mぐらいのが来るかも知れない」と考えた人が多かった様子です。それが10mを超える大津波でしたから、「備えていた」人たちまで押し流されてしまいました。

海岸から幅数kmにわたって下左のような光景が続きます。ヘドロの平原に家や車や松の木や家財や漁船などが混在して取り残されています。漁港近くの市街地では下右のように大量の瓦礫とともに漁船なども一緒くたに取り残されています。このヘドロの下には多くの家屋の土台も埋まっています。



名取市郊外（農住混在地）



亘理町市街地

亙理町や七ヶ浜の農地は下のような状況です。ここは刈り跡が残っている水田地域ですが海水に浸かったままです。大量の瓦礫を片付けたうえ潮抜き

するまでに3～5年にかかる予想です。有害成分を含む可能性があるヘドロで覆われた所では、土を入れ替えないと耕地に戻せないといわれています。



七ヶ浜の水田地域

海が燃えながら迫ってきた気仙沼

岩手県境の気仙沼市は気仙沼湾の深い入り江を挟んで市街地が広がっています。奥へ入るほど勢いを増した津波が7波にわたって押し寄せましたが、2度目の大津波で「商港岸壁」にあったガソリンや軽油の大型タンクが押し流され、流出した油類に着火しました。火の海になった津波が西風にあおられて対岸に押し寄せ、湾の東側で火災を広げながら最深部まで達しました。そのため、海岸段丘までの海岸市街地幅数百mが帯状に焼き尽くされてしまいました（本記事上部の写真）。沢山の住民が押し流され

たり、焼死するとともに水産加工場や商店も全滅してしまいました。経済活動の主要部がやられたわけです。

今も海水に浸かったまま……

気仙沼市の火災を免れた地域も、今回の震災で60～70cmの地盤沈下を起こしています。加えて「世界一頑丈な（はずであった）防潮堤」の決壊により、下左写真のように海水が引かないところや、下右写真のように満潮になると海水に浸かる市街地が発生しています。



学生ボランティアへの期待

被災地は、重機を入れるためにとりあえず主要街路の瓦礫撤去を急いでいます。筆者が訪問した震災後一ヶ月を過ぎた時点では、市街地は瓦礫撤去のためまだ方々で立入り禁止でした。しかし、段差（アスファルトで応急補修してある）や片側通行の箇所は方々にありましたが主要道路は支障なく走れる状況でした。大型重機も届き始めましたのでこれからピッチも上がり、5月中には少なくとも道路の不通は局地にとどまると予想されます。地方鉄道は遅れそうですが、バスはかなり復旧するでしょう。

一方、現地は、道路以外の片付けは相当時間がかかると予想されます。とくに海浜部と個人住宅の片付けは人手が必要です。高齢者が多い地域ですからその困難さがしのべられます。こうした災害は、神戸の震災がその後の日本の街づくりや防災、ボラン

ティア活動を促したように、被災地から学ぶことは少なくありません。目に見えて役立つ奉仕活動が体験できる機会でもあります。

ボランティアは「派遣する（他人の意思で行かせる）」ものではありませんが、自己判断と自己責任で行ってくるように「奨励」することは有意義でしょう。学校としてはそのための受講代替措置（例、ボランティアのレポートで出席扱いにする）なども含めて送り出す工夫をしてみるべきではないかと考えます。被災地の義捐金も必要ですが、いつになったら被災者の手に渡るか判然としない献金（阪神大震災では被災者には一部しか渡さず、分配の困難さを理由に、1年半後に1億円以上を「震災復興基金」にした自治体もあった）よりも、少なくとも大学関係者としてはこうして出かける学生を支援する方が、はるかに有意義ではないかと思いますがいかがでしょうか。

中間総会報告

総会後、地域の活性化をテーマにシンポジウム 「みんなで考えよう！地域の元気」

「フレンズ・TOHO」中間総会が2010年11月12日（金）、名古屋ガーデンパレス（中区、栄）にて開催されました。本総会における審議事項はなく、すべて報告事項でした。本年度の事業活動の中間報告が主に報告されることとなりました。

総会後、愛知東邦大学「地域創造研究所」と共催で「地域の活性」をテーマにした講演会とシンポジウムをおこないました。第1部の講演は、愛知東邦大学教授 御園慎一郎（愛知東邦大学教授、フレンズ会員）氏による「みんなで考えよう！地域の元気」。

第2部はシンポジウム。パネリストは、服部 敦 氏（中部大学 中部高等学術研究所教授）、村上 浩 氏（あま市市長）、水野 孝一 氏（財団法人につぼんど真ん中祭り文化財団専務理事兼統括プロデューサー）。コーディネーター役に御園氏。

地域の元気を作り出すキーワードは、「ないものねだり」から「あるもの探し」。活性化には、人材が重要で、自らが主体的になる“自主”と自ら考える“自考”無くしては成功しないことが指摘されました。

およそ170名の聴衆で会場は満席となりました。元気な地域を見習い、新たに元気な地域が誕生できる指針が示された会となりました。

（愛知東邦大学地域創造研究所『所報』2011.3 No.16 講演会報告 に詳細）。

Rinnai

リンナイ株式会社

〒454-0802 名古屋市中央区福住町2番26号 ☎052-361-8211



名鉄百貨店アイカード
会員募集中

meiteisu

自然と親しむ会 春の例会

四谷の千枚田と鳳来寺自然科学博物館を訪ねる



ホソバシャクナゲ



加藤貞亨館長の説明を聞く参加者



千枚田の全景と鞍掛山

棚田は、耕作適地が少ない山間部でもイネの栽培が可能のように人々が営々と築いてきた水田です。石を積み上げ、ひな壇のように段々になった水田は、長野県や宮崎県に多く見られます。愛知県新城市（旧鳳来町）にある「四谷の千枚田」も鞍掛山（883m）の山麓に広がっています。農業従事者の高齢化により、標高差があり、農業機械の導入を阻む棚田はどこも耕作が放棄されてきています。しかし、この四谷は「鞍掛山麓千枚田保存会」によって、よく守られています。

5月14日（土）、四谷の千枚田を訪れました。梅雨の走り数日降り続いた雨も上がり上々の天気恵まれました。多くの水田は代かきを終え、田植えを待つばかりでした。水を湛えた棚田は水面が光を美しく反射し、水鏡となっています。石積みの美しさと水路や畔に咲く花、レンゲやハルジオンに感嘆しながら、標高差210mの棚田の農道を歩きました。加藤貞亨（鳳来寺山自然科学博物館）館長の話によれば、この棚田は明治時代壊滅的な被害を受けました。梅雨時の長雨と雨台風により、倒木で堰き止められた水が一拳に流れ、土石流が起きたのです。ところが、近隣の村人の援助により見事に復活。再び棚田がよみがえりました。いま、棚田の柔らかな曲線が自然と一体となって造形的な美しさを見せています。

チョットお知らせ

TMCC－東邦コミュニティーカレッジの
ご案内

◇シルバー人生を豊に

7月7日～21日 木曜日

18:30～20:00 全3回

◇心のキャッチボールを楽しんでみよう

6月30日～7月14日 木曜日

10:40～12:10 全3回

◇これで悩み知らず！

簡単ファッションコーディネート講座

7月2日～16日 土曜日

10:00～12:00 全2回

◇カラーコーディネートレッスン

6月22日～7月20日 水曜日

10:40～12:10 全3回

詳しくは、東邦学園「名東コミュニティ・カレッジ」
担当者まで

－問合せ先－

TEL：052-782-1241（受付時間 9:00～17:00）

「フレンズ・TOHO」会員特典：受講料半額補助

編集後記

東日本の津波災害、言葉を失いました。被害者に10代が少ないように思えました。調べてみると、岩手、宮城、福島で13,135人（4月19日現在。警視庁まとめ）の犠牲者の内、65%が60歳以上。津波や地震の経験者です。高齢者で身体能力の衰えも考えられます。が、経験に頼りすぎたため、という考えも否めないように思えます。10代の被害者割合が3.0%でした。子供たちは経験を頼りにすることなく、防災訓練に従い、津波の危険を避けるために高台に避難しました。（岩手県釜石市内小中学生約3,000名が「ほぼ全員が無事」『産経新聞』4/13）「想定にとらわれなかった」ことや「自らの判断」で「率先避難者」となったことが命を救うこととなりました。

“想定外”という言葉は何度も聞きました。一人の人間が経験できることは、たかだか数十年。自らの「経験」を頼りにするだけでなく、経験を越えた想像や発想ができるようにすることの大切さを知らしめられました。

経験に頼るだけでなく、新しい発想や創造力でさらなる「フレンズ・TOHO」の発展を考えます。